物語り、ラシヤメンお吉とさげすまれた悲運の末路は、ついに投身自殺によって流転の一生を自ら断つた。剃に腐乱した体は恐れられまつる人かないのを、玉泉寺の和尚が憐れをかけて葬つたと伝えられている。

今は女優水谷八重子によつて、愛人鶴松の墓と並んで立派な比翼塚となつている。下田を訪れる人の多くはお吉の墓前に足を止めている。玉泉寺の地下の先住は、この繁盛ぶりに、極楽で微苦笑しているにちがいない。

「踊り子」の一行は大島へ。その大島へはここからも船は通う。踊り子は居なくて、私たちを送る人は誰もない。

南伊豆の入り陽は、美しく下田の港に映える。私は娘を促して、東京への直行便の時間を気にしながら、駅へ急いだ。

（この項 終り）

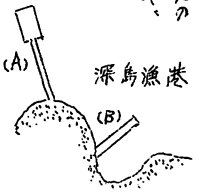
（月記） 筆者 富沢氏の去る五月の上京は、伽耶宮 伊勢水神社の社殿復興、建築等多年に亘る功績が認められ、東京の神社本庁での表彰式の参列のためで、この旅行記はその栄光にかがやいてのものでありました。 （編集子）

〔正誤・記入をそう〕 ― 次のページから六ページにわたり ―

△まず、ページを (89-27) から (89-32) まで 六ページつけて下さい。その△三七ページ 下段 日付は、五月はあいにくの雨でのびしたわけで 六月二十四日、△三〇ページ 深島地図は 蒲江市役場の資料を写したのですが、新しい防止(突堤)を下図(A)のように書いて、いささかおかしいなと思って、行って見たところ(B)のように出来ていました。現地でたしかめることの大事さを思いました。

△三一ページ 下段 終りの方 清水氏は 前区長、現校長 井上氏は前校長、現在校長は 落合 求氏です。

△三二ページ 上段 終りから二行目 下小学校分校、原本のおやまり、分校を消す。



探訪記

深島を訪ねて

（羽柴 記）

時：昭和四十八年六月二十四日
参加者：三十六名（写真連盟の方々を含む）

それは蒲江町の教育委員会の方々の斡旋御援助と、深島の前区長清水氏の御案内によつての成功であつた。まずこのことを、声を大にして申し上げたい。

天候も幸いであつた。恵まれた一日であつた。みんな口々に、よかつた、満足したと喜んで帰つた。深島から帰りの船では風波がはげしく、だいぶ波をかぶつたが、名にし負う深島である、ホンのちよつぴり、おみやげに見せてくれた深島の波、そう思いたい。

深島は景勝の地ではない。すばらしい自然景観はないでもないが、それはすべてきびしい現実である。観光診断では深島の開発とうたつているが、深島のきびしい自然條件はそのことを、かなり拒みつづけるであろう。

藩政時代から、この島の開発にはかなりの努力をつづけている。そしてずつと失敗をくりかえしている。なぜであるか。それは土地は可耕地を広々としつているが、所心の水が少ないことであり、汐風がはげしいことである。水はパイプを海底に沈めて敷いて、陸地へ引くことは出来ようし、望みはしてるが、波がはげしいことが決定的である。これが人々の往き来を妨げ、物資の移送に困難をきたす。

深島にも蒲江や丸市尾などと同じように電力線が引かカラーテレビ・電気洗濯機・冷蔵庫などが、都会並に使える。電話も公衆電話ただ一個ではあるが、ともかくも出来ている。「そら、急患」という時、医者は呼べるが、

（三十三ページへ）

深島ご案内のことば

江戸時代中期、佐伯藩は赤木村の百姓を移住させて、この島の開拓をはかったが、それは殆んど失敗した。何故であろう。

そして、やがて流人の島となった。

明治になり、沿岸漁業が盛んとなるにつれて、深島のまわりは、ぶりをはじめとする魚族の宝庫であった。

終戦後、僻地が見なおされ、分教場は本校からはなれて独立、五学級の小、中学校となった。

立派な漁港が出来、電燈がともり、テレビも冷蔵庫も出来、電話も開通した。

きびしい自然條件を克服し、漁業を盛んにし、文化をこの島にかちとっている、その島の実態を、この足で島に上陸し、陽にかがやく林の中の小道を歩き、断崖から眼の下に寄する波しぶきをこの眼で見て、歴史の流れを想うて見たい。

いささかでもこの刷りものが、今日の見学の手引になれば幸いである。

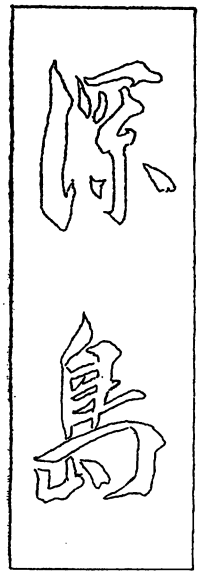
（羽柴）

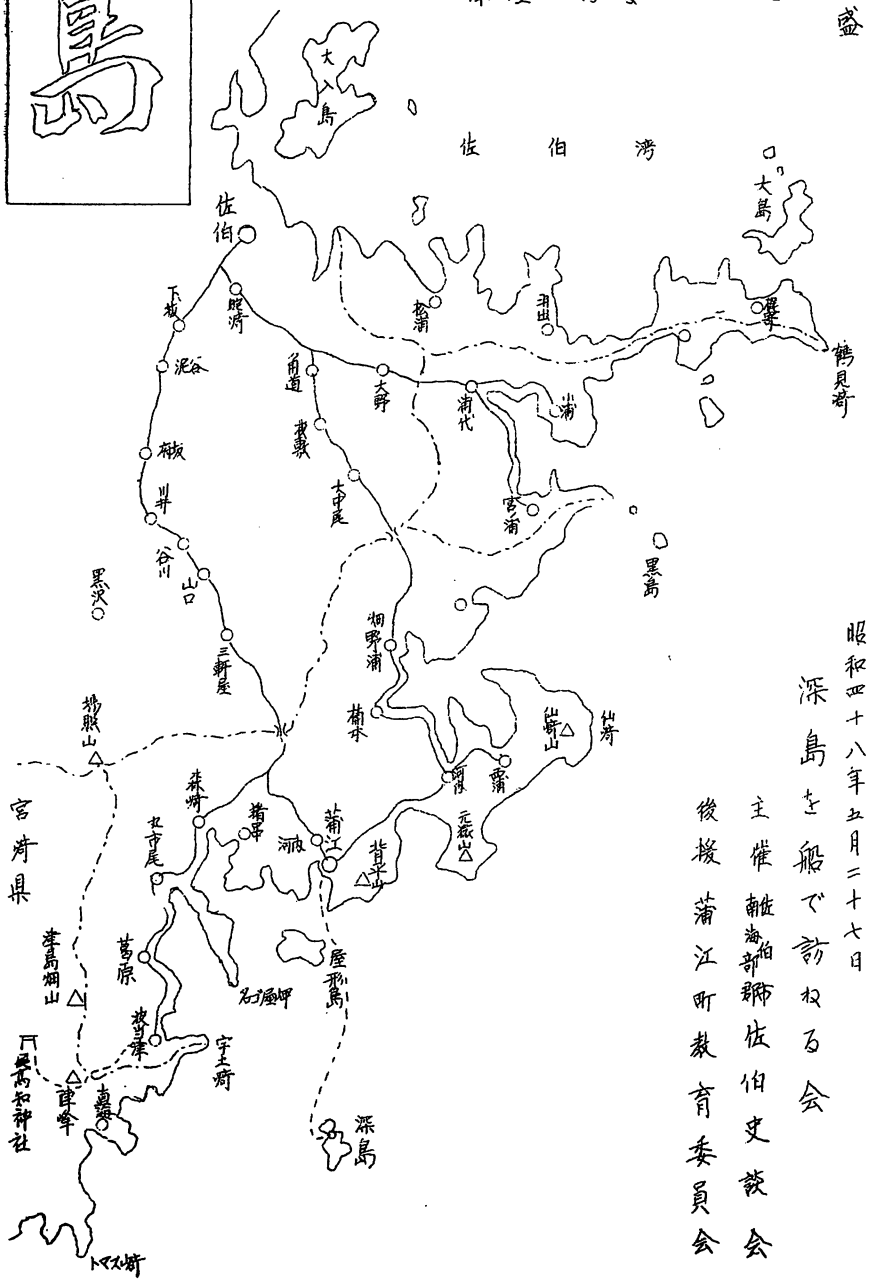
昭和四十八年五月二十七日

深島を船で訪ねる会

主催　南佐伯郡佐伯史談会

後援　蒲江町教育委員会





伊能忠敬の測量日記

江戸幕府天文方、伊能勘解由

文政元年（一八一八年）七十四才で没す。

四月朔日（文化七年一一八一〇年）朝大曇風波高同所逗留測見合せ、

両手共六ツ（朝七時ごろ）

我等（伊能）、青木、永井、上田、長蔵、蒲江葛原浦字貝ヶ谷より初め、蒲江波当津浦を歴て、同浦字和田鼻まで測る。一里〇七丁〇二間。大より蒲江森崎浦字鶴巣岬より初め、名古屋の少し前測る。一十一丁五十三間、外に坪前後見切り五六丁。

坂部、下河辺、築田、箱田、平助、蒲江浦属深嶋一周。一里一十一町三十四間二尺、横切五十六間

此嶋ハ佐伯領の流人嶋（るにんとう）にて、田畑も少し。

あり。小屋一軒建て置き、当時流人三頭ありと云う。

両手共八ツ半（午後三時ごろ）頃に帰宿。

深島の罪人逃走

「温故知新録」　関谷隼人編

深島の罪人万四郎と云う者、島を脱出、保戸島へ逃れたるを、塩屋村の内蟹田の百姓次兵衛なる者、沖合にて捕へ候。

（寛政十年五月）

深島の詩歌

鰐洲夕照　秋月橘門

斜日下孤洲　寒風捲層浪
水禽忽驚飛　巨鰐横江上

斜日孤洲に下り　寒風層浪を捲く
水禽忽ち驚きて飛び　巨鰐江上に横たわる

鰐島名照　松岡蒙

海潮天低水　風鳴山欲揺
斜陽急明滅　巨鰐浪間跳

海潮く天は水より低し、風は鳴りて山揺れんと欲す、斜陽忽ち明を滅し、巨鰐浪間に跳ぶ

夕照　志喜子

沖つ浪千重折りかくる深島や
岩根の木木に夕日照りそふ

深島民謡　甲斐清作

招く深島及どりのかげに
夢きむすぶか　渡り鳥